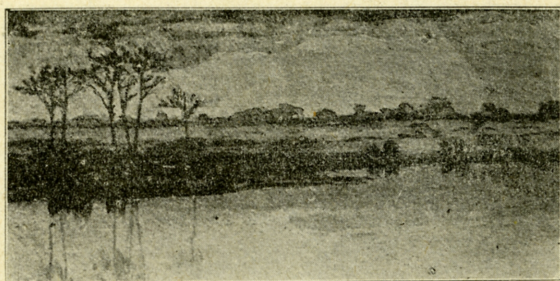


Powell 氏の水繪に就て

三宅克己

亞米利加組育のホワイツスター會社の、ブリタニックと云ふ巨船に乗つて、ホドソン河口を出帆爲たのは、恰度今から八年前のことでありますが、自分は一生の間にこの時程得意なことは又と無からうと思ひます。彼の有名なブロークリンの釣橋を後に殘して、自由の銅像を見送りながら、渺々たる太西洋に乘出した時は、もう自分は一國の帝王にでも爲つた様に思ひました。豫て萬國地圖を擴げて、朱や青の線を無闇に引た所謂アトランチック、オーシオンとは、自分が今走つて居るこの海かと思ふと、世界も自分の掌中にあるめ込むことが出来る様で、已程世界に豪いさうして大きい者は無からうと云ふ念がもう火の様に燃へて居ました。

とは云ふものゝ自分は最下等船客の一人で、その哀な姿は自分以上に誰も見出すことは出来ませむでした。下等船客數百名の裡、亞細亞人は唯の自分一人でありました。右を向ても左を見ても、毛色の變つた異人ばかり、愈々薄暗い船室に案内された時は、有繋に好い心持は爲ませむでした。さあその内



六甲山のほとり佐藤清

に船は段々と沖合に出ましたが、さしもの巨船も何うやら搖ぎ出しました。帆網を吹晒す風の音、エンジンやプロペラーの響は船の動搖と共に次第に烈しくなりました。元來船には極めて

弱い自分、もう全く閉口爲て地圖の上で想像爲たアトランチック、オーシオンなるものゝ、實際とは甚だその趣向を異にして居ることを悟り、一國の帝王も今は船底にベッタリと倒れて、青ざめた死人同様に爲つて仕舞ました。

ホドソン河口を出て九日間はずくの病人で、クラッカーとゴエの外は何も口に入れなかつたのでも、如何に弱つたかゝ解るでありました。

二日目の夕刻から波は愈々高く、船は益々搖れ始めました。そうして時々甲板に打上る大波は、恐ろしき凄き響を爲て總ての物を洗ひ去つて行くやうです。自分はこの響を耳にするのみでも、最早何うしても立つ元氣は無い。

親切なホーイはパンとビーフテツキの一片を態々持て來て呉れました。然し自分はノーサンキュと斷るのが勢一杯でありました。時に傍に居つた者不思議な顔して、日本人は米の外には何も食はぬと見へると、少しく冷笑の風がありましたが、如何にせむ最早

全くアトランチックの波濤に閉口爲て仕舞ふたのでありました。處が或日のことベッドを列べたアイルランドの大工の爺の助で、思切つて甲板に上つて見ました。さうして掌中に握り潰すことが出来ると思ふたアトランチックの大波を實際に見ました。空は一面の灰色で

水の色は深き藍色で、^{インディゴ}

その凄きことはバシフ

キツクの夫れとは大に趣向を異にして居ります。この一場の活畫は

自分が大西洋を航海した、唯一の紀念物であり

りました、假令自分は青菜の萎れた様に哀れ

はかない有様でありましたが、今このすさま

じき大洋を航海爲しつゝあることを思へば、

さすがに勇壯なる感の湧き来るを覺えたのでありました。

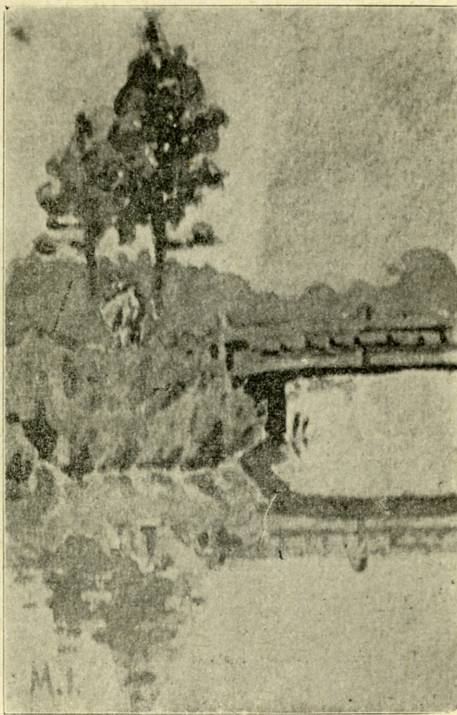
指折り數へて待つて居つた九日目の朝は、終に來てもう今にリ

バブルが見へると云ふ騒ぎになりました。自分もこの時は元

氣付て顔も洗ひ、髪もブラッシで掻き揃えて、一番新しきホワ

イトシャッ着て澄し返つたものでした。

リバブルから倫敦までは約二百哩、僅に四時間餘の直行で先づ無事倫敦に着きました。着た翌日自分は直にナショナルギヤラリーを見物爲て、その足で又直にサウスケンシントン美術館に行きました。この美



孝正田池川小の冬

術館には特に英國水彩畫の歴史的コレクションがあつて、先づ自分には此上も無い研究場でありました。今こゝに此畫堂の様子をお話爲ると餘り長引から、これは更めて他日と爲ますが、兎に角に新古幾多の畫家の作畫が秩序正しく列むて居ります。自分は恰度飢へた狼が食を漁る様に、一々と作畫を見物して居りました。現代作家の製作中に最も強く自分を刺激爲たものがありましたが、抑もそれが大下君の所謂『御馴染のボーエル氏の海の圖』であります。自分はこの畫に對しては、技術以外に或る特別の感激を受けたのです、即ち彼の凄^{すご}きをそろしき大西

洋の波浪を聯想爲たのでありました。勿論その聯想を自分に與へた力は、確に巧妙なる技術の結果に外ならぬ譯であつて、筆者その人の技巧に敬服爲すべきは敢て論する迄も無いことであるが、議論はさて置き自分は眞實其海景に感心致しました。

空が一面の灰色で、インヅゴの海原に白き波が立つて居つて、島が無ければ船も見え無い。唯鷗の二三羽が波間を飛び行くのみであります。恰度自分が嘗て見た彼の大西洋の波の景色と彷彿たるものがあります。さうして見て居る内に、風の音や波の船端に打突る響が耳に響く様な氣が爲て、一幅の水彩畫は端無くも再び自分を恐ろしき凄き大西洋に伴れて行つたのであります。

筆者その人の名は Sir Francis Powell. と云ふて、スコットランドに住むて居る水彩畫家なのであります。當時尙存命でスコットランド水彩協會の會頭であつたのです。そこで自分は稽古ながら且つ又他日の紀念にもと、是非共模寫を爲やうと云ふ考を起し、早速美術館の事務所に行き至つて無覺束い英語で其旨を述べました、處が案外容易に承知爲て呉れまして、一週間に二回通學することゝなりました。然るにこゝに面倒なのは、ボーエル先生は當時末だ存命の畫家であるから、模寫希望者は一々畫伯の承諾を受ければ、手を下す譯に行きませぬ。そこで自分は恐るゝボーエル先生に其旨を通じました。愈々手紙が書けていざポストに入れる時に、果してこれがボーエル先生の手許に届くであらうかと、マー一寸夢の様な氣がしました、する

と三日目に返事が來ました。これは承諾の旨を書たもので、其時の自分の悦は何とも譬様も無い位でありました。そこで直に其手紙を持參して美術館に行き、こゝに公の許可を得て愈々模寫することゝなりました。

處がこのボーエル先生の波の圖と云ふのが、非常な精密な繪であつて、一寸模寫と云ふ譯に行きませぬ。夫れには波の微細な形が一つと丁寧に畫であるので、イザ模寫と云ふ段に至つて、もう何うしても手の附け様が無いのです。但し見れば見る程益々感服するのみで、種々に工夫して終にその模寫を仕上りました。勿論これは技術研究の爲にもなりましたが、然し一には大西洋航海の紀念として、尙又一つには倫敦到着後の First influence. として、こゝにこの紀念物を得たのであります。さうして自分は洋行土産の一つとして、この模寫畫を今に大切に珍重爲て居るのです。原圖は即ち *A Grey Day at Sea* と題するものでありまして、尺に尺四五寸の小幅であります。勿論この繪を以て館中唯一の名作とは云ひませぬ。又ボーエル先生が英國水彩界に於て、果して絶代の名家であるか何うか、これも固より知り得る處ではありませぬ。唯然し自分に對して一種不恩義な感想を興へしめ、端無くもブリタニック甲板上の光景を聯想せしめたことは即ち事實で、少なくとも自分一人に取りては終生忘るゝことの出來無い繪なのであります。然るに斯も因縁ある繪が、曩には一度大下氏の手に依りて水彩畫架の巻頭に掲げられ、今又本誌の口繪としてこゝに再びこれ

を相見るのは、自分に取リ如何てか一片の感無くして止みまじやうか。ボーエル先生の海の繪に就ては、實にこれだけの因縁があります。

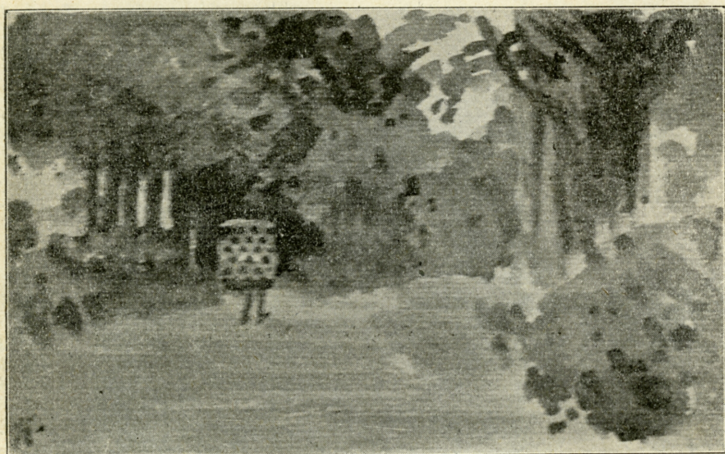
然るにこの繪が屢々諸君の御目に入るのは、自分に取リてこの上も無い悦であります。

されば自分は今こゝに大下氏が熱心縮寫製版の煩勞を執られたるを謝すると共に自分が滿腔の喜悅を以て讀者諸君と共にこの口繪を迎へたいのであります。

(終)

△ △ △

後から足音がして立留まつたので、きつと彼方で寫生してゐる友人が來たと思つて、丁度腹が北山だつたから大聲で『君辨當にしゃう』といったが、返事がないからよいと振返つて見たら、それは知らない他處の人で、にやつと笑はれたのには、少々極りがわるかつた。



第 十 八 回 小 林 隆 郎

スケッチ、エハガキ展 覽會を觀て

大下 藤次郎

△この程上野に催された同好畫會のスケッチ、エハガキ展覽會といふのは、東京神奈川各中學生の成績品及び素人團體の作品を集めたもので、鉛筆水彩油繪を重とし、繪葉書を合して約千點第一回としては好成績であつた。

△就中群を抜いてゐたのは慶應のパレットクラブ、獨乙協會の紫水會、紫瀾會(これは専門家も交つてゐた)金翅會、高商の彩友會(圖案的エハガキに於て秀てゐた)花蝶會、麻布中學、府立第一、第四などである。

△商工中學の鉛筆畫は極めて正確で教育といふ方面から見たら申分がない、併し彩畫に移つてからも同じ筆法でゆくために器械的な無趣味なものの計り出来るのは遺憾である。

△婦人團體の出品としては女子美術學校生徒の油繪が五六點、